

氏 名	中野 正世
学位の種類	修 士 (看護学)
学位記番号	修 士 第 2 0 4 号
学位授与年月日	平成 2 8 年 3 月 1 0 日
学位論文題目	女性看護職の職業と家庭の両立における役割間葛藤 に関する研究 - 離職した看護職と仕事を継続している看護職との 比較検討 -

論 文 内 容 要 旨

※整理番号	209	(ふりがな) 氏 名	なかの まさよ 中野 正世
修士論文題目	女性看護職の職業と家庭の両立における役割間葛藤に関する研究 —離職した看護職と仕事を継続している看護職との比較検討—		
<p>[研究の目的]本研究の目的は、女性看護職の職業と家庭の両立における役割間葛藤を明らかにすることである。</p> <p>仮説 1. 離職した看護職は、仕事を継続した看護職に比べ役割間葛藤が高い。</p> <p>仮説 2. 仕事を継続した看護職は、離職した看護職に比べ役割間葛藤の対処行動が高い。</p> <p>[研究方法]1.研究デザイン：質問用紙を用いた横断的調査研究</p> <p>2.家庭と仕事の役割間葛藤：ワーク・ファミリー・コンフリクト尺度(金井,若林 1998)5件法で測定、葛藤への対処行動：ワーク・ファミリー・コンフリクト対処行動尺度(加藤,金井 2006)5件法で測定した。</p> <p>3.分析方法：各項目の単純集計を行った。属性と尺度の関連を見た。離職した看護職と仕事を継続した看護職の役割間葛藤について尺度の平均得点の比較をした。尺度については、95%信頼区間を求めた。検定には、スピアマン相関係数と Mann-Whitney U 検定と χ^2 検定を用いた。いずれも有意水準は5%以下とした。統計処理には統計学的パッケージソフト SPSS Statistics 22 for windows を用いた。</p> <p>[結果]〈仕事を継続している看護職〉調査票配布：380 部（10 施設）有効回答数：308 部（有効回答率：96.9%）〈離職した看護職〉調査票配布：190 部（10 施設）有効回答数：111 部（有効回答率：87%）であった。</p> <p>（ワーク・ファミリー・コンフリクト：WFC）</p> <p>WCF 尺度で有意差があったのは、WCF 尺度合計で仕事を継続している看護職は、47.95 ± 11.03、離職した看護職は、50.92 ± 12.14 であり離職した看護職の方が高かった（$p=0.04$）。家庭仕事葛藤では、仕事を継続している看護職は、8.64 ± 3.11、離職した看護職は、11.88 ± 3.98 であり離職した看護職の方が高かった（$p=0.000$）。WFC 対処行動尺度で有意差があったのは、WCF 対処行動尺度合計で仕事を継続している看護職は、68.62 ± 9.98、離職した看護職は、71.67 ± 9.79 で離職している看護職の方が高かった（$p=0.007$）。家庭役割低減対処では、仕事を継続している看護職は、8.69 ± 5.14、離職した看護職は、21.53 ± 5.10 で離職している看護職の方が高かった（$p=0.000$）。仕事役割低減対処でも仕事を継続している看護職は、8.38 ± 4.67、離職した看護職は、11.42 ± 3.00 で離職している看護職が高かった（$p=0.000$）。仕事をしている看護職は、家庭仕事葛藤と家庭役割充実対処と仕事役割低減対処が関連しており、離職した看護職は、家庭役割充実対処と仕事家庭葛藤と家庭仕事葛藤が関連していた。</p> <p>[考察] 離職した看護職の役割間葛藤が仕事を継続している看護職より高かった。また離職した看護職の役割間葛藤対処行動も仕事を継続している看護職より高かった。離職した看護職は、役割間葛藤も、対処行動も共に高いことが示唆された。</p> <p>[総括] 1. 離職した看護職は、仕事を継続した看護職に比べ役割間葛藤が高いという仮説 1 は、支持された。2. 仕事を継続した看護職は、離職した看護職に比べ役割間葛藤の対処行動が高いという仮説 2 は、支持されなかった。</p>			